

北支での軍隊生活の追憶

秋田県 小原 喜代四郎

私は秋田県仙北郡長野町北長野で、富岡吉雄の三男として大正十一（一九二二）年一月二十日に生まれました。長野尋常高等小学校卒業後、農業経営する両親の手伝いをしました。耕作田地面積は約三町歩、ほかに畑地では野菜を栽培する中規模の農業経営でした。私は三男ですが、長男は軍隊入営中、次男は四歳で死亡したので両親との三大家族でした。

私にも徴兵検査の日が来しました。昭和十七（一九四二）年七月十五日、徴兵検査受けるよう通知が届きました。

検査場は仙北郡角館町尋常高等小学校で、当日は体を清め、神棚、仏壇の前で甲種合格のお祈りを済ませ検査場に向いました。

身体検査、口頭試問も無事終わり、試験管の前

に不動の姿勢で結果を待ちます。書類を見ていた検査官から「甲種合格」と言われ、「甲種合格、ありがとう御座いました」と復唱とお礼を申し述べ検査場を去りました。

急ぎ足で家に帰り両親に報告すると瞬間、両親共ガツカリした表情でした。それもそのはず私が軍隊に行くと働き手が減る、合格した喜びの反面、両親を思うとかわいそうになってきました。

昭和十七年十二月一日、現役兵証書が役場から届き、昭和十八年一月十日、北部第六十二部隊に入隊しました。入隊兵は旭川連隊区と秋田連隊区の各地の出身者で、顔見知りの者は一人もおりませんでした。

一月十五日、行き先の発表のないまま秋田駅発の臨時列車に乗車しましたが、前もって出発日の知らせが無かったので見送りするのは駅員のみでした。

一月十六日、下関駅着、同日、同港を出帆、釜山港に上陸、釜山の会館に宿泊しました。

一月十七日、釜山駅出発。

一月十八日、鮮満国境通過。

一月二十日、山海関通過。

一月二十二日、北第二九七四部隊竹内隊第二中隊に配属される。

中隊長は陸軍中尉竹内義雄、教官は陸軍少尉宮本義勝、助教は陸軍軍曹曾根正、助手は陸軍兵長田川竹治の上官が我々の教育に当たりました。教育期間中一番辛かったのは戦闘における各個教練でした。

二月中旬ごろ、下士官候補の希望者の募集がありました。私には長男がいるし、除隊しても故郷には工場、企業など就職先もなく、農業やるにしても分家して分けてもらう田地も無いので、結局都会に出て就職するより軍人を職業とすることに申し込み受験しますと見事合格となりました。このことについては両親には内緒にしました。一期の検閲が終わると直ぐに第一年度下士官候補の教育が始まり、一年度の教育が終了。さらに

二年度の下士官候補教育のため、石門町にある北支那陸軍教導学校に入学しました。

入学式の学校長訓示終了後、内務班長から一人一人に西洋紙と鉛筆が渡され、今日の学校長の訓示を書きなさいと言われました。何をどのように整理して書けば良いのか要領得ない。皆、顔見合させたままで鉛筆を持つ者はいない、班長は「お前ら、何聞いてきたのか。俺が一行一訓、しゃべるから書け」と、次の訓示を書かされました。

『願わくば 我に七難八苦を与え給え』

己れある身の 力ためらん』

この言語は今だに忘れることはありません。

それからはお互いに初年兵になったり、指導者になったりしての訓練でした。

また、指導計画書の立案提出、夜は精神訓話、戦陣訓の学科でした。

ここで教導学校歌を紹介します。

一 山紫さきに水清く

七洲の野に生まれたる

我ら健児は今此処に

集いて学ぶ文武の木

二 燃える血潮は殉国の

たけき心のその中に

優しき者は学び舎の

跡なものこる心から

三 空清らけき朝ぼらけ

玉なす汗を拭いつつ

淡々ごうごう勇ましく

武技練る声も勇ましく

四 遙かに遠し我が行く手

教えを胸に刻みつ

今この門を立たんとす

若き雛初巢立つ

校歌は以上ですが、今でも座右の銘としている

当時教わった精神訓話並びに戦陣訓を左に述べま

す。

一 神靈上にありて照覽し給え心を正し身を修

め篤く敬神の誠を捧げ常に忠孝を心に念じ仰いで

神明の加護に恥じざるべし。

二 総じて武勲をおごらず功を人に譲るは武人の高風とするところなり、他の栄達を嫉まず己れの認めざるを恨まず省みて我が誠の足らざるを思ふべし。

三 清廉潔白は武人氣節のよって立つところなり、己れに勝つことあたわずして物欲にとらわれる者いかでか皇国に身を捧ぐるをえん、身を持つるに冷厳なれ、事に処するに公正なり行えて俯仰天地にはじざるべし。

四 忠孝一本は我が国道義の精粹にして忠誠の士は必ず純情の孝志なり。

五 幹部は熟成もて百行の範たるべし。上正しからざれば下必ず乱れる。

六 諸事誠直をむねとし誇張過言を恥とせよ。

七 万物の霊長であるゆえん、尊崇、羞恥心、思考心あるとゆうこと。

以上。

教導学校の教育、訓練が終了し原隊に復帰しま

した。ここで不在中に入隊した召集兵の助教を命ぜられました。

昭和十九年六月ごろ、部隊の編成替えがあり、私は第三八七大隊辻隊に配属となりました。

昭和二十年一月十五日、昭和二十年度初年兵が入隊、助教を命ぜられました。

教育者として常に注意すべき点は、兵の身元、性格、思想、行動、心身の状態、交友関係、通信等個人の実情をしっかりと把握しないと教育に支障があることを感じました。

一方、作戦参加は、昭和十九年六月ごろまで河南作戦参加。

昭和十九年半ばごろから終戦までは老河口作戦参加でした。

老君台山の占領命令を受けた時、山の手前に舟江と言う大河が流れており、どうして渡るか皆で智慧を出した結果、河辺の竹を五人か六人つかまれる程度の長さに切り、縦列に竹につかまりつつ互いに助合えば渡れると、自信をもって渡り始めた

途端、敵の猛銃撃に遭いました。飛沫立つ中、運よく死者、負傷者も無く渡り終わって安どした途端、再び猛攻撃を受け、残念ながら三人の犠牲者が出ました。

「戦闘は行軍及び激動後開始せられ、かつ数昼夜にわたるを常とする」と教えられたことを思い出します。

いよいよ老君台の攻撃となりましたが、日中は敵の攻撃の恐れがあるため夜間攻撃の命令があり、日没を待つて山を登りました。

しかし山は岩山で敵弾を避ける濠を掘るのが困難であるため、辻隊長は「ここで攻撃したら我が軍全滅する」と考え、全員下山させました。

その時、部隊長が来て「伝令が来て全員山へ登ったから今ごろ占領したと思うとのことだ来てみたら何だこのさま、日本軍は退却は脱走とみなされること知っているだろう、辻隊長責任とれ」と激怒して帰りました。

辻隊長は周りに皆を集め俺のやったことについて

ては、部隊長の言葉通りだ。俺一人はいつ死んでも本望だが、君たち全員死んだら今後どうなる。全員健在だったら全員無事で勝利出来る。作戦の練り直しが必要と考え一時下山したのだから理解してほしい」との言葉に皆感動し涙ぐみました。

ここで作戦の変更があり、敵の攻撃を避けるため夜間移動することとなり、落ち着いた所は小さな集落があちこちに見える静かな山間地でした。

行軍中にマラリヤで熱を出す者もあり、また食糧不足に悩まされると住民の畑より失敬して腹拵えしました。本当に悪いことしました。

それまで陣地で歩哨が濠から少しでも顔を出すと、敵弾が飛んで来るような戦場の毎日でしたが、突然その気配が無くなりました。全身を濠から出しても何の変化もない。後で分かったことでしたが、この日は八月十五日、日本の無条件降伏の日でした。

八月十八日「日本は八月十五日無条件降伏したので戦闘中止せよ」との知らせがあり、皆愕然がくせんと

しました。

それから点々と移動の抑留生活が八カ月、開封を経て上海に到着しました。

昭和二十一年四月二十六日、上海港出港。四月二十九日、佐世保港に上陸し復員手続き、身体検査など終えて、海軍兵舎で復員関係の補助作業に着きました。そして六月八日、生まれ故郷に無事復員しました。

十日ぐらいたってから両親が死亡、そのうち祖父と農業経営している立派な娘がいるから養子にならないかと誘われました。私は前にも述べた通り、今後共、慣れた農業でいこうと思っただけだったので承諾し、現在稲作をはじめタバコ、空豆、花、牛、小牛生産等で頑張っております。

最後に

一 戦争のない平和な日本

二 他人への思いやり、優しい方々の日本で

ある

ことを願います。